

盛夏号

京 印 季 報



2019 夏季特別企画

京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科総合演習を共同企画
印刷レクチャー・組合員印刷工場見学会開催





目次

巻頭言／理事長 中西 隆太郎	2
夏季特別企画 京都造形芸術大学 芸術学部情報デザイン学科総合演習を共同企画	
印刷レクチャー・組合員印刷工場見学会開催	4
令和元年度通常総会開催	19
京都府印刷業界功労者顕彰式・優良勤続従業員表彰式開催	21
京都府知事表彰(組合功労者表彰)を受ける	26
令和元年度近畿地区印刷協議会定時総会開催	27
ビジネスマナー講座・印刷技術入門講座開催	30
教育研修セミナー開催	32
各種共済制度等加入促進キャンペーン開催のご案内(各種共済制度等の特長、飲料 自販機設置紹介事業のご紹介)	37
4月・5月・6月定例理事会	40
委員会だより／総務委員会	41
／教育研修委員会	41
会合だより／京都府印刷工業組合・京都府印刷関連団体協議会	42
／京都青年印刷人月曜会	42
関連団体だより／(一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部	44
／京都府製本工業組合	46
／京都府紙器段ボール箱工業組合	46
統計だより／材料価格定点調査・集計結果より	48
パートナーシップ会員のご紹介	49
組合員ニュース	54
ビデオ・DVD貸し出しのご案内	57
書籍のご紹介	58
事務局からのお知らせ	59
印刷会館利用状況	59
組合日誌	60
組合員異動	61
賛助会員異動	61
パートナーシップ会員異動	61
計報	61
編集後記	61



夏号表紙イラストレーション コンセプト

暑い夏でも風鈴の音が聞こえてくると涼しさを感じます。

夏にしか聞こえない音を見つけると嬉しい気持ちにさせてくれます。

そんな夏の小さな幸せを表現して描きました。朝顔と風鈴で夏らしさや涼しさを感じてもらえると嬉しいです。

京都造形芸術大学こども芸術学科3年次生 芦葉 琴音

巻頭言

京都府印刷工業組合理事長

中西隆太郎



元号が平成から令和になり最初の通常総会を去る5月28日に開催し、関係各位のご協力のもと滞りなく了えることができました。組合員の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

今回の総会において、組合員の皆様に特にお知らせしたかった事が2つございます。

一つ目は、2年後に迎える組合創始130周年記念事業です。

当日のご挨拶の中でも申し上げましたが、顕彰・表彰式プログラムの最終頁に掲載されておりました通り、令和3年5月29日(土)に組合創始130年記念式典を開催いたしたく存じます。

前号・4月春号の巻頭言でご報告の通り、この節目の年に向けて、組合組織の増強に取り組んで参りました。新規組合員の加入促進に努めるとともに、新たにパートナーシップ会員制度を設けましたが、これは、今まで加入いただけなかった印刷関連業者の方にも組合に参画していただける制度です。

加入される企業、加入をお勧めいただいた企業の双方に特典のある「組合員・パートナーシップ会員加入促進キャンペーン」(5月10日まで)を推進しましたところ、皆様のご協力のお陰をもちまして、組合員3事業所、パートナーシップ会員19事業所にご加入・ご入会いただきました。この度の活動と実績に対しては、本部団体の全印工連にも評価していただき、全印工連総会の場で表彰を受けることができました。ご協力賜りました関係各位の皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

キャンペーンは終了しましたが、組合員・パートナーシップ会員の募集は随時行っておりますので、組合へ加入していただける可能性のある会社をごございましたら、是非とも加入をお勧めくださいますようお願いいたします。加入申込資料は組合事務局にご請求ください。京印工組に一社でも多くの印刷会社、同関連業者の皆様がご参画くださることを心より願っております。

お知らせしたかったことの二つ目は、今年4月から施行された働き方改革関



連法についてです。今年は有給休暇5日取得が話題となりましたが、来年からは我々中小企業にも残業規制が厳しくなります。今までと同じ仕事をこなすためにはそれなりの改革が必要です。しかし、それぞれの会社において、何をどのように改革すればよいのかわからないのが現実かと存じます。

全印工連では、全国の組合員企業の一社一社がハピネスカンパニーを目指す事を願い、ブランドスローガンに「happy industry人々の暮らしを彩り幸せを創る印刷産業」を掲げております。そしてその中心事業として「幸せな働き方改革」を提唱しております。

本事業にはステップ1からステップ5までの5段階があり、ステップ1の「働き方改革の必要性を理解する」から始め、ステップ2と3の「目標を設定し、計画をたてる」の中で、何を、どのように始めるのかを理解します。段階的に理解を深め、今年完成するステップ4と5の「就業規則や賃金制度・評価制度を整備する」までプログラムが組まれています。

これらのプログラムは1から5まで順番に全て理解しなければ役に立たないというものではありません。それぞれに独立性があり、自社で必要とするステップだけ研修・実践されても十分役立つように作られております。全印工連では、各ステップの講習会を全国の各府県工組で開催する計画であり、当組合においても開催したいと考えております。是非とも組合員各位の管理職や従業員の皆様方に受講いただきたいと存じます。

これからも組合員の皆様にとって有意義な組合事業が運営できるよう全力で取り組む所存です。皆様方のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

京都府印刷工業組合
教育研修委員会



Collaboration

京都造形芸術大学
情報デザイン学科

～京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科総合演習を共同企画～

京都府印刷工業組合 教育研修委員会では、京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科の総合演習「地域に根付いた情報デザイン」に全面協力し、同学生に対する印刷レクチャー（4/24）、並びに印刷工場見学会（5/15）を企画・開催いたしました。

本事業は、就職を控えた学生に対して印刷業への理解を深めてもらうことを目的に、3年前より実施しているものですが、後にご紹介する事前・事後アンケート結果を考察すると、業界のイメージ向上に資することができたとともに、印刷会社への就学志向を導きだすことにも繋がったのではないかと存じます。

盛夏号の特別企画では、本事業の実地レポートを紹介させていただきます。後半には、本事業にご協力いただいた京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科准教授の丸井栄二氏、土山印刷株式会社代表取締役の土山雅之氏より頂戴したメッセージを掲載しています。是非ご一読ください。

「印刷レクチャー」実施 平成31年4月24日（水）午後1時10分～2時30分

講師／森田 隆司 氏（京都府印刷工業組合教育研修委員、(有)森田美術印刷）

講師／中嶋 恒雄 氏（土山印刷株）



印刷レクチャー会場

去る4月24日(水)、京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科の総合演習に、本年度の工場見学先である土山印刷株式会社より顧問の中嶋恒雄氏、当組合の教育研修委員会より、佐藤靖委員長、江戸孝典副委員長、笹原あき彦副理事長・委員、森田隆司委員、中西厚詞委員、谷口智事務局長の7名が参加、学生22名が受講された。

初めに森田委員が講師を務め、「地域に根付いた情報デザイン」をテーマに講義が行われた後、後半は中嶋氏が講師を務め、「6色高品位印刷とワイドフォーマットUVインクジェット」をテーマに講義が行われた。

はじめに

佐藤委員長より、貴重な講義の時間を頂戴できたことへの感謝の意を込めた挨拶が述べられた後、「当企画は今年で3回目となるが、印刷レクチャー、並びに工場見学会が、皆様一人一人に『どのような役割を果たすのか?』がとても大事なことだと思っている。印刷に興味を持っていただくことはもちろん、進路の選択肢の一つとして、印刷業界への就職を希望してくださることを期待している。講義前に事前アンケートを、また工場見学後に事後アンケートを実施し、皆様の心境にどのような変化が生じたかを拝見させていただきたい」と、今回の事業目的を説明の後、事前アンケートに回答していただいた。



挨拶を述べる
佐藤委員長

い回答が得られた。

続いてプリントとプレスの違い、紙幣と電子マネー、印刷の分類、印刷方式、網点や階調、AMスクリーニングなど、多岐にわたる印刷概論についての説明が行われた後、「プロと素人の違いは、プロが携わることによって整理された情報、かつ正しい情報であることが担保されることである」と説明された。

また、デザイナーになるための資質やデザイナーの仕事領域についての解説が行われた後、「皆様はどのようなデザイナーになりたいのか?」という問いかけに対して、志高く既に未来を描いている方がおられる一方、少しドキッとされたような方も見受けられた。

最後に、「付加価値の高い印刷物とは?」という課題を挙げ、「各々でじっくり考えて欲しい」と呼びかけを行った。

印刷レクチャー



講師を務める森田委員

前半は森田委員より、印刷の概論や印刷会社とデザインの関係についての講義が行われた。

講義では、印刷は生活に必要不可欠であること、大日本印刷と凸版印刷の2社による寡占の状況であることに

加え、市場動向等についての説明が行われた後、世界の三大発明は何であるかを問いかけたところ、グーテンベルクの活版印刷をはじめ全て正し

6色高品位印刷とワイドフォーマットUVインクジェット

続いて中嶋氏より、見学先である土山印刷株式会社の紹介が行われた後、「パソコンや携帯電話、テレビなど身の回りにRGB（光の三原色）で表現される様々なメディアがある。一方、一般的なオフセット印刷は

CMYK（色の三原色）によって表現され、RGBと比較して65～70%の色表現範囲しかない。6色印刷では、再現しにくいオレンジ(O)とグリーン(G)の2色を付加することで、RGBと比較して80～85%の色表現範囲をカバーすることが可能とな



講師を務める中嶋恒雄氏

り、デザイン性の高い印刷ニーズに対応できる」と、同社の強みの一つである6色高品位印刷についての説明が行われた。

次に、同社のもう一つの強みである、ワイドフォーマットUVインクジェットについて、「広告費用の割合において、折込チラシの下降が顕著となる反面、『展示・映像』の成長や『交通広告』『POP(店頭広告)』が堅調に推移し、小ロット・厚物へのニーズが高まっている。このニーズに対応すべく導入されたのがワイドフォーマットUVインクジェットであり、ホワイトインクとクリアインクの組み合わせにより、今まで表現できなかったデザインが可能であるとともに、ゴルフボールやモバイルバッテリーなど厚みのある素材(最大50mm)や、大型のパネル(最大出力サイズ1602×3100mm)にも印刷できる」と説明があった。

最後に江戸副委員長より、熱心に聴講していただいたことへの感謝の意を込めた閉会の挨拶が述べられた。

授業終了後、製品サンプルの周りに多数の学生が集まれ、手に取って触れたり質問をされるなど非常に興味深い様子であった。



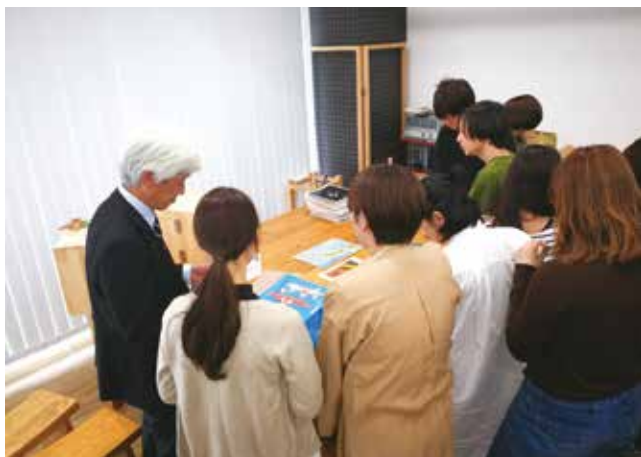
挨拶を述べる江戸副委員長

丸井栄二氏による講評



京都造形芸術大学芸術学部
情報デザイン学科
准教授 丸井 栄二氏

「印刷のことを知っていてデザインすることと、知らないでデザインすることには大きな違いがある」と述べられた後、「パソコンの画面を見ただけは到底理解できない多くのことが印刷では起こり得ること、一つのデザインのミス、色の修正、誤字脱字によって印刷現場がどれほど影響を受けるのかを次回の工場見学で学んでほしい。そして自分たちのデザインの力をもって、印刷物を使って地域の問題を解決することもできるということを理解して欲しい」と説明された。



「印刷工場見学会」実施 令和元年5月15日(水) 午後1時30分～4時00分

見学先／土山印刷株式会社



工場見学会参加者一同

京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科の総合演習の一環として、土山印刷株式会社様のご協力のもと、同社への工場見学会が開催され、当組合より、高橋東作副理事長、佐藤靖委員長、中西秀彦副委員長、江戸孝典副委員長、笹原あき彦副理事長・委員、森田隆司委員、中西剛委員、中西厚詞委員、谷口智事務局長の9名が参加、学生21名が受講された。

はじめに

有清裕晃氏(土山印刷(株)経営本部課長代理)の進行のもと、初めに佐藤委員長より開会の挨拶が述べられた後、同社代表取締役社長の土山雅之氏より、「お客様から喜んでもらうためには、他社と同じ事をしてはいけない。当社は独自の強みを活かした取り組みを行っているが、まだまだ不十分であり京都府印刷工業組合とともに成長したい。本日は皆様に印刷が好きになってもらうことを目標としている」と、歓迎の意をこめた挨拶が述べられた。

次に、寺本明広氏(土山印刷(株)マーケティンググループ課長)より、同社の歴史や沿革、事業内



挨拶を述べる
佐藤委員長

容についての説明、約20分の会社案内のDVD上映等が行われた後、2班に分かれて見学が行われた。

1. 菊全オフセット印刷機の見学

実際に稼働している菊全オフセット印刷機の前で、オペレーターの方から印刷の原理や色の順序など詳細な説明を受けた。学生は思い思いにメモをとり、イラストを書いておられ、印刷機の音やインキの臭いなど、五感で現場を学んでいるように見受けられた。



挨拶を述べる
土山雅之氏

2. ワイドUVインクジェット印刷機の見学

同社のワイドUVインクジェット印刷機を見学した。サプライズな演出として、最初に正面玄関

で撮影した集合写真が印刷・加工され、マウスパッドが製作された。インクジェットのヘッドが動く様子を注視する学生、サンプル製品を手に取り指でなぞる学生など、熱心に見学される様子が伺え、各々アイデアにつながる発見があったように思えた。

3. 制作、POD、製版、表面加工の見学

制作室に立ち入ることはできなかったが、周囲から見学することができた。また、制作室の前には同社のヘキサクローム印刷のパネルが展示されていて、順路を進みながら、インクジェット印刷機、オンデマンド印刷機、表面加工機、CTP等について、説明を受けながら見学することができた。



4. 印刷物実物体験

食堂にて、インクジェットで出力された成果物、4色のプロセス印刷された成果物、FMスクリーニングで製版され、同社のヘキサクローム高品位

印刷された成果物を比較することができた。高品位印刷の表現できる色域の広さに学生たちからは驚きの声があがっていた。

5. 商品紹介及び6色RGB印刷について

川口伸幸氏(土山印刷(株)データマネジメントグループ課長代理)より、6色RGB印刷の詳細な説明を受けた後、同社の商品紹介が行われ、公共インフラを担う企業、ウェディング関係の企業、京都が誇る伏見の日本酒を製造販売する企業など、馴染みのある企業の事例紹介が行われた。

6. 印刷会社におけるデザイナーの役割について

京都造形芸術大学の卒業生でもある網師本真理子氏(土山印刷(株)クリエイティブユニット係長)より、略歴、学生時代、自身が携わられた仕事などプロフィールを述べていただいた後、「クライアントのセールスポイントや伝えたいことを、目に見える形にして価値と満足を提供することがデザイナーの役割である。情報伝達手段の基本的な考え方は今も昔も同じであり、今学んでいることは必ず将来に役立つ」と、学生の皆様に熱の入ったメッセージを発信された。

7. 質疑応答

「プロセス印刷の場合、リッチブラックによって深い黒を表現できるかと思いますが、6色印刷の場合、オレンジとグリーンを入れることでより深い黒を表現できるのでしょうか?」との質疑に



対して、「オフセット印刷のプロセス印刷において、理論上、CMYKの4色をそれぞれ100%、合計400%の総インキ量での配色は可能だが、インクの積み重ねは裏移りやブロッキングなど様々なトラブルを引き起こす原因となり、印刷物が汚れる原因となる。従って、印刷機にはタック値と呼ばれる総インキ量の限界値があり、当社の場合は合計350%となっている。タック値を越えないインキ量での配色は可能であり、6色を配合する、いわゆる当社のスーパーリッチブラックという表現は可能である」との回答があった。

まとめ



挨拶を述べる
中西秀彦副委員長

京都造形芸術大学 情報デザイン学科の丸井氏より、「このような機会を与えていただいた土山印刷株式会社、並びに京都府印刷工業組合の皆様」に感謝申し上げたい」と御礼の言葉を頂戴した後、学生の皆様に向けて、「入稿して画面のボタンを押せば、納品日に指定した場所に印刷物が届く時代だが、その過程の中で、責任を負って多数の人が印刷に携わっていることを私たちは理解しなければならない。経済的に余裕のない学生はネット通販を利用する機会が多いが、私た

ちはデザイナーでもある。社会に出たとき、校正紙を出力する前、出力後に必ず確認を行い、責任を持って出稿できる人になって欲しい。今回の見学会は、印刷現場に多くの人が携わっている姿を知り得る最高の機会だったと思う」と総括を述べていただいた。

続いて中西副委員長より、「土山印刷様、大変高度な印刷技術をご披露いただき感謝申し上げます。私たち組合員のほとんどが中小企業だが、創意と工夫でまだまだ技術を培う余地があることが良く理解できた」と、同社に向けた謝辞が述べられた。

最後に中嶋恒雄氏(土山印刷(株)顧問)より「見学会は面白かったでしょうか？アンケートの結果を楽しみにしている。将来どのような進路に進まれるかわからないが、本見学会を機に、是非とも印刷業界にも興味をもって欲しい」と述べられた。

事業が終了した後も、学生の皆様は同社への質問が尽きない様子であった。また、サンプルを何度も見に行かれる姿が多数見受けられ、本事業が双方にとって大変有意義なものであったと確信した。

なお、本事業の一環として、去る6月13日(木)、京都造形芸術大学において、組合員2社の参加のもと合同企業説明会を開催した。説明会のご報告を本誌41頁で行っていますので、併せてご一読ください。

(文責 編集委員会)



京都造形芸術大学総合演習 印刷レクチャー・組合員工場見学会参加者への 事前・事後アンケート集計結果について

教育委員会副委員長 中西 秀彦

今回の組合員工場見学会の成否を判断するにあたって、対象となった学生にアンケートをお願いした。例年と同じく、効果を定量的に把握するため、SD法を用いたアンケートを行った。

SD法と言うと難しそうな印象を持たれるかもしれないが、アンケートなどで非常によく使われる技法である。それぞれの質問項目に対して、以下のような尺度で答えさせる。

その通りだと思う
おおむねそう思う
どちらともいえない
あまりそう思えない
全くそう思えない

これによって、それぞれの質問に対する評価を単なる「好き」「嫌い」のレベルから細かく分析することが可能となる。また、同じ質問を講義・見学会以前と、見学会以後に実施し、その変化を測定することでこの事業の効果を測定する。

質問項目について

質問項目は以下の8項目である。これは前年のアンケートを踏襲している。以下は事前事後共通に実施した設問である。基本的には例年の質問項目を踏襲したが、今年の見学対象が6色印刷を特徴とされる土山印刷様であるため、5番の質問を変更した。

1. 印刷業は先進的産業である
2. 紙以外のものにも印刷することができる
3. デザインやDTPも印刷の仕事である
4. 印刷業はこれからも発展する
5. カラー印刷もまだまだ改良の余地がある
6. 印刷業界は楽しそうだと思う
7. 印刷業界も進路先として考えられる

8. 印刷機械オペレーターをやってみたい
以下2項目については事後のみ実施した。

1. この授業は役に立った
 2. このような授業を増やして欲しい
- これ以外に定性質問として

事前に

「今まであった印刷物(本・雑誌・チラシ・広告・ポップ・パッケージ)の中で、これは良い、面白いと思ったものを具体的にあげてください」

事後に

「授業の良かった点、悪かった点を自由にお書きください」

「今日、見学した機械を使って、なにか新商品のアイデアがあればお書きください」

の3項目を投入している。これは、事前質問については、まったく予断のない状態で現在の若者達の印刷に対するイメージを推し量るのに利用し、後者は今後の同様な事業を実施するに当たり参考にするためである。

結果 1. SD法評価

表 1 SD法による認知変容一覧

●事前・事後アンケート

印刷業は先進的産業である

	4/24		5/15	
その通りだと思う	4 名	20%	14 名	61%
おおむねそう思う	3 名	15%	7 名	30%
どちらともいえない	10 名	50%	1 名	4%
あまりそう思えない	3 名	15%	1 名	4%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	6.80		8.96 差 2.16	

印刷業界も進路先として考えられる

	4/24		5/15	
その通りだと思う	6 名	30%	8 名	35%
おおむねそう思う	10 名	50%	9 名	39%
どちらともいえない	2 名	10%	5 名	22%
あまりそう思えない	2 名	10%	1 名	4%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	8.00		8.09 差 0.09	

デザインやDTPも印刷の仕事である

	4/24		5/15	
その通りだと思う	11 名	55%	18 名	78%
おおむねそう思う	8 名	40%	5 名	22%
どちらともいえない	1 名	5%	0 名	0%
あまりそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	9.00		9.57 差 0.57	

紙以外のものにも印刷することができる

	4/24		5/15	
その通りだと思う	19 名	95%	23 名	100%
おおむねそう思う	1 名	5%	0 名	0%
どちらともいえない	0 名	0%	0 名	0%
あまりそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	9.90		10.00 差 0.10	

カラー印刷もまだまだ改良の余地がある

	4/24		5/15	
その通りだと思う	8 名	40%	18 名	78%
おおむねそう思う	7 名	35%	5 名	22%
どちらともいえない	5 名	25%	0 名	0%
あまりそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	8.30		9.57 差 1.27	

印刷業はこれからも発展する

	4/24		5/15	
その通りだと思う	12 名	60%	20 名	87%
おおむねそう思う	6 名	30%	3 名	13%
どちらともいえない	2 名	10%	0 名	0%
あまりそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	9.00		9.74 差 0.74	

印刷業界は楽しそうだと思う

	4/24		5/15	
その通りだと思う	9 名	45%	15 名	65%
おおむねそう思う	7 名	35%	7 名	30%
どちらともいえない	4 名	20%	1 名	4%
あまりそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	8.50		9.22 差 0.72	

印刷オペレーターをやってみたい

	4/24		5/15	
その通りだと思う	2 名	10%	2 名	9%
おおむねそう思う	4 名	20%	12 名	52%
どちらともいえない	10 名	50%	8 名	35%
あまりそう思えない	2 名	10%	1 名	4%
全くそう思えない	2 名	10%	0 名	0%
計	20 名	100%	23 名	100%
平均点	6.20		7.30 差 1.10	

●事後アンケート

この授業は役に立った

	5/15	
その通りだと思う	20 名	87%
おおむねそう思う	3 名	13%
どちらともいえない	0 名	0%
あまりそう思えない	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%
計	23 名	100%
平均点	9.74	

このような授業を増やして欲しい

	5/15	
その通りだと思う	19 名	83%
おおむねそう思う	3 名	13%
どちらともいえない	1 名	4%
あまりそう思えない	0 名	0%
全くそう思えない	0 名	0%
計	23 名	100%
平均点	9.57	

本年は事前と事後で回答人数が異なり、単純な点数比較ができないため、各項目に等間隔で重みづけを行った上で、その平均値を比較した。理論上の最高点は10.0点、最低点は2.0点である。

結果は劇的な効果を示した。すべての項目について、講義・見学の結果、好意的な変化が生じている。各項目について詳しく見てみたい。

1. 印刷業は先進的産業である

SD尺度平均値で6.80点から8.96点へ、実に2.16点という認知変容があり、大きく改善した。特に「どちらともいえない」から「そう思う」への転換が顕著である。前年度の認知変容1.15点と比較してもきわめて大きく、今回の見学先である土山印刷様の事業が先進的なイメージを提供するものであったことが如実にわかる。

なお、こうしたアンケートでは回答者は否定的な回答をしにくく、否定的な印象をもつ場合、「どちらとも言えない」とする傾向がある。従って「どちらとも言えない」が「そう思う」へ変化したのは劇的にイメージが好転したといえる。反面、事前質問で「どちらともいえない」が選ばれたことは実質的には「そうではない」と書くところを遠慮した結果であって、印刷業界のイメージ戦略がまだ充分ではないことの証左である。今後の業界としての取り組みが望まれる。

2. 紙以外のものにも印刷することができる

これは9.90点から10.00点へ0.10点の変容であるが、最終得点は満点であり、元の時点から非常に点数が高く、得点の変化の余地が少ない設問だった。これはいわゆる天井効果と呼ばれるもので、

元々天井にあればそれ以上に伸びる余地がない。事前に十分に知識があったものと考えられる。芸術系の大学と言うことで普段から紙以外へのデザインということに慣れ親しんでいるからと思われる。

3. デザインやDTPも印刷の仕事である

9.00点から9.57点へ、0.57点という好転を見た。ただし、この設問も事前段階から9.00点と高得点であって、学生がはじめからその様な認識をもっていたと思われる。昨年は1.27の好転だったが、これは事前の得点が低かったからでもある。逆に言うと、本見学も3年目となり、授業などで事前に「印刷会社でもデザインが行われる」ことが、知られるようになったからではないかと思われる。

4. 印刷業はこれからも発展する

9.00点から9.74点へ0.74点増加している。「おおむねそう思う・どちらとも言えない」から「その通りだと思う」への変化が顕著であり、見学会を通じて、印刷業界の発展が単なる印象から強い確信へと変わったと考えられる。効果が実感できる項目でもある

5. カラー印刷もまだまだ改良の余地がある

この設問は6色印刷を特徴にされている土山印刷様を踏まえて、投入した設問である。8.30点から9.57点へ1.27点と大きく印象が好転しており、見学の効果が大きかったことがわかる。土山印刷様のプレゼンテーション自体も4色から6色への革新を訴えるものであり、学生に印象が強かったものと考えられる。

6. 印刷業界は楽しそうだと思う

8.50点から9.22点へ向上した。0.72点とこれもかなりの改善を見ている。工場見学を経て、楽しさが伝わったと考えるべきで、今回の工場見学の成果といえるだろう。

7. 印刷業界も進路先として考えられる

8.00点から8.09点へ0.09点の増加で、残念だが、変化なしと考えるべきであろう。ただ、元々8点

は比較的高い数字であって、印刷業界への就職そのものが忌避されているわけではない。工場見学を経ても、進路先としての好感は変わらなかった。楽しさや、発展度合いが学生に伝わっているのに、それが就職に結びついていない。今後検討課題である。

8. 印刷機械オペレーターをやってみよう

6.20点から7.30点へと1.10点と大幅な増加を見た。ただし、事後でも7点台にとどまる。この設問は元々点数がきわめて低く、その中で改善を見たことはむしろ積極的に評価してもよいかもしれない。

事後のみ取得した質問についても分析を試みる。

1. この授業は役に立った

9.74点である。満点が10点であることを考えると、全面的に肯定されていると考えてよいと思われる。

2. このような授業を増やして欲しい

9.57点である。前項目ほどではないが、否定的評価をした学生は一人もいなかった。きわめて肯定的にとらえられていると結論づけてよい。

結果2. 定性質問評価

表2 自由記述による学生の印刷物商品評価

●今まであった印刷物(本・雑誌・チラシ・広告・ポップ・パッケージ)の中で、これは良い、面白いと思ったものを具体的にあげてください。

- 雑誌「デザインの引き出し」、それぞれの刊でおもしろい仕掛けがあって良い(5名)
- シルクスクリーン(2名)
- 石にシルクスクリーン(2名)
- 金か銀、特殊なインクを使っている印刷物(2名)
- 温度によって色が変わるインクで刷られたもの
- ブラックライトで反応、太陽光で反応するインクを使った印刷
- 蛍光色の印刷物や箔押しなど
- オレンジの特色を前面に使った、世界の記号を集めた辞書
- スイスの大学の展示会パンフレット、きつすぎるぐらいのピンクで刷られていて目がチカチカするほどですが面白い
- 「城崎へかえる」、湊かなえ著、カニがテーマ
- 美容室のショップカード、人の顔があって、髪の毛を自由に切って作れるアイデア
- 活版印刷、リソ
- アイデアの印刷
- 名刺、個人個人で特殊な印刷をしていて見るのもさわるのも面白い
- 世界ブックデザインの本はいろいろ面白い
- プレスバターサンドのパッケージ
- 天文学と印刷のポスター・カタログ
- 紙わざ大賞のフライヤー
- 毛が生えている印刷
- ホログラム

「今まであった印刷物(本・雑誌・チラシ・広告・ポップ・パッケージ)の中で、これは良い、面白いと思ったものを具体的にあげてください」という質問をただ漠然となげかけた。結果はデザイン系という特殊な領域ではあるにせよ若者に今の印刷業界がどのように考えられているかがわかるものとなっている。

この結果についてはあまりに多岐な回答があったため、特に集計はしていない。

表3 自由記述による学生の授業評価

●授業の良かった点、悪かった点を自由にお書きください。

- デザインは学校で学ぶことができるが、印刷は実際に機械や工程、印刷物を見ないとわからないことだらけなので、本当に良い勉強をさせていただいた。6色印刷はすごい。
- 4色印刷と6色印刷の違いをわかりやすく目で見ることができ、印刷の可能性の幅の広さを感じた。
- 実際の現場(人)で印刷が行われていることを見ることができた。
- 会社概要の中で印刷の仕組みを聞いてから工場見学できたのでとてもわかりやすかった。
- 最新の印刷技術や現場を見ることができて面白かった。
- 網師本さんの話の仕方やテンポ感がとても聞きやすく自分に注目させるのが上手だと思った。大きな機械を実際に見ることはあまりないので、自分の目で確認し、日常的に見ている印刷物が作られている現場を見て感動した。印刷物に対しての重みが自分の中でできた。
- 印刷を実際に行っているところを見せてもらえ

たり、様々なサンプルも見ることができよかった。

- 実際に印刷しているところを見るのは初めてだったので興奮した。サンプルもたくさん見せていただけたので技術がどんなものかよくわかった。
- 今まで入稿までしか知らなかったが、印刷工程を知ることができた。原理を理解することで印刷の可能性を考えることができるようになった。仕組みを理解するのはとても良いと思った。
- 実際にどのように、どのような機械で印刷しているのか実物を見ながら見学できてよかった。見学する前と印刷工場のイメージが変わった。
- 4色機は見たことがあったが、6色UV印刷機は初めて見ることで貴重な機会だった。
- 理解しているようでしていなかった印刷の技術や仕組みを改めて学ぶことができた。実際にプリンターが動いているところを見て、いつも自分たちが使っているプリンターとの違いや、6色印刷のすごさを実感できた。机の上で調べたり考えたりするよりも見て体験することがよい刺激になった。
- 丁寧に案内していただいたのでよくわかった。実物を見ながら質問できたのがよかった。
- 実際に考えていたアイデアが形になっていることを見ることができ、印刷の可能性をより身近に感じられた。

「授業の良かった点、悪かった点を自由にお書きください」についても一覧表を見て欲しい。絶賛である。特に、今回は6色印刷という特殊な印刷ではあったが、そのメリットが充分学生に理解された。「またデザインと現実的な商品の折り合

- 最新の機材や技法を実際に見たり触れたりすることができて良かった。細かな質問や疑問にも答えてもらったのでとても分かりやすかった。
- 印刷がどのようにされているのかをリアルに見ることができたのはとても良かった。
- 面白い機械を知ることができた。
- 実際に印刷工程を見たり触れたりすることができて勉強になった。
- 6色印刷のことを授業で聞いていて色の違いを感じていたが、実際に動いているところを見ることができとてもよい経験ができた。
- 今までパソコン上でプリントを押せば印刷物ができていて、その行動が当たり前になりつつあったが、そこに至るまでに多くの人がかかわっていることを知った。印刷は知っているようで知らないことがたくさんあって面白い。
- なんとなくでしかイメージしていなかった印刷の裏、仕組みを実際に目で見ることができ、とても良かったと感じた。最終的には人の手、目で確認しているところを見て人の力の大きさを感じた。
- 印刷の入稿をした先に何があるのかを見ることができ面白かった。
- 実際に刷られている現場を見ることができ本当に良い機会だった。

い」ということへの気づきも多く、非常に有益な試みであったことがわかる。また卒業生のデザイナーがプレゼンテーションをしたがそれも好印象だったようである。否定的な評価はなかった。

表4 自由記述による新商品アイデア

●今日、見学した機械を使って、なにか新商品のアイデアがあればお書きください

- ニスによる偽装防止(会員証や学生証など)、ニスによる光で見えるサイン・ピクトグラム
- 普段、ジェルネイルをセルフでやっていますが、UVプリンターと同じ要領なので、それでラインストーンなどが埋め込まれたジェルネイルシールが作れそう。簡単なものは売られています、大きな装飾がついたものはまだ売られていないはずです。
- UVでの厚盛り6色印刷を使ってみたいと思いました。
- 特色6色印刷で、美術館の展示の図録などが刷られていたら良いのと思いました。(日本画や油画など)色の深みや色彩のすばらしさが図録でも表現されるとよいと思いました。娯乐的・コレクション的な部分も大きいので、制作費が

多少かかってもよいと思いました。

- おしゃれ点字。
- 断裁したトンボとカラーピッカのついていた紙は何か使えそうと感じた。
- 印刷物を裁断したの残りのいらぬ紙で何かできるのではないかな。

「今日、見学した機械を使って、なにか新商品のアイデアがあればお書きください」の問いについても、一覧表にあるとおり、学生らしい豊かな発想のアイデアが出されている。技術的に可能なものが多い。色々な業界で学生の若い柔軟な発想から新製品ができていることを考えると、印刷業界でもあらたな試みを考えるべきだろう。

評価と結論

「組合員工場見学会」は今年で3年目である。いずれも大成功と評価して良いと思われる。結果を見る限りでは「百聞は一見に如かず」で、学生に対し確実に印刷業界のイメージ向上を実現している。もちろん本事業は組合員諸氏の多大な時間や労力の提供があり、また今回対象となった土山印刷様の全面的な協力なくしてはありえなかった。深く感謝の意を表したい。

3年目となり、前回・前々回との比較も可能となったことで、新たな知見も生まれている。やはりそれぞれの会社が力を入れる点に対し、学生は

それに対して反応をかせしてくる。今回の6色印刷の強調などは、まさに学生がその点に感銘を受けていたようだ。

ただし当業界への就業志向という点については必ずしも向上していない。また、設問によっては天井効果が多く、事業効果測定がうまくいっていないところもある。しかし、これらは毎年、続けていくことで、知見として積み上がっていくこともあるので、細かい修正は加えつつも、基調はかえるべきではないと考える。

今後は、こうした結論を踏まえ、具体的に学生の就業というアクションを引き出すための事後の試みが重要になると思われる。

京都府印刷工業組合 教育研修委員会と 京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科による共同企画 総合演習「地域に根付いた情報デザイン」を了えて

京都府印刷工業組合 教育研修委員会と京都造形芸術大学 情報デザイン学科による共同企画、総合演習「地域に根付いた情報デザイン」を了えて、企画の段階から全面的なご協力を頂戴した、京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科 准教授の丸井栄二氏、土山印刷株式会社 代表取締役の土山雅之氏より、この度の取り組みに対してのメッセージをお寄せいただきましたのでご紹介いたします。



「3年目となる『印刷レクチャー』、『印刷工場見学会』を了えて」

京都造形芸術大学芸術学部
情報デザイン学科准教授 丸井 栄二

今回で3年目となる「印刷レクチャー」ならびに「印刷会社見学会」を開催いただきありがとうございます。毎年3年生を対象としているため、学生は入れ替わりますが、毎回新たな発見のあるレクチャーや印刷技術にこれからの印刷の可能性を感じています。

今年度は学内での新たな試みとして、印刷レクチャー前に「印刷の可能性」と題した課題を設定しました。印刷物としての紙媒体とモニター越しで得られるデジタル媒体を比較し、そのメリットとデメリットを交差させながら印刷物の可能性を学生たちが表現し、レクチャー当日には組合の方々が観られるよう展示をしてお迎えいたしました。作品を観ていただいた組合の方からは発想の面白さや自由さについてお褒めのお言葉をいただき、学生たちの自信と印刷への関心につながったように思います。

レクチャーではキャッシュレス化について、日本の紙幣の精度の素晴らしさとその普及の関係も話していただき、身近になりつつあるキャッシュレス化に疑問を持つ学生も出てきました。

印刷会社見学会では事前にお渡ししていた学生の実験的な印刷データの刷り上がりとその過程を見学でき、担当学生含め参加学生全員が感激していました。この印刷データはその後も実験を繰り返していただき、コラボレーション企画のよ

うなカタチで納得のいく印刷物が仕上がっています。こちらの印刷物は9月に開催される学内での学生作品展で展示を行います。

1年目では書籍関連とポスター印刷、2年目はパッケージ、3年目の今回は特殊インクジェット印刷と、教員である私だけが毎回違った印刷の現場を見ることができ、この印刷レクチャーと印刷会社見学会が今後も続くことになれば、これからは進化の過程までも見ることになるのではと思っています。

印刷物にはこれからも可能性があります。人の目に写る紙の輝きの優しさはモニターからは感じることはできません。デジタル技術は進化する一方で問題も生み出してきました。その問題の大部分は「優しさ」が解決するのではないかと考えています。目や手に触れる優しさは紙媒体でしか得ることはできません。印刷の進化の過程で紙も進化していますが、触れるという行為はこれからも残る行為です。デジタルではスピードとしての斬新さを求め、印刷物は触れる行為の優しさを求める。この違いがあるからこそ印刷物には可能性があると思っています。

この場をお借りいたしまして、若い学生への技術の提供とご説明に関し、改めてお礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。



「京都造形芸術大学 京都府印刷工業組合 工場見学会」を終えて

土山印刷株式会社

代表取締役社長 土山 雅之

拝啓 小暑の候 会員企業様各位におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、過日弊社にて行われました「京都造形芸術大学・京都府印刷工業組合 工場見学会」におきましては、30℃を超える暑さの中、多くの学生及び京印工組役員の皆様にお越しいただき、誠に有難うございました。

この見学会は京都造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科の総合演習の授業の一環として行われたもので、第1回の共同印刷工業株式会社様、昨年の日本紙工株式会社様に続いて、今年は京都府印刷工業組合様より弊社にご指名をいただき、印刷業界の理解及び学生のキャリア形成支援のお役にたてればと思い、有難くお受けさせていただいた次第です。

当日は組合の教育研修委員会の佐藤委員長の開会のお言葉に続き、私より皆様に挨拶の言葉を述べさせていただきましたが、学生の皆様の若く明るく活き活きと耳を傾ける姿に、今回の見学会をお受けして良かったと改めて感じました。

続いてマーケティンググループの寺本課長より当社の会社の概要や社会貢献、社内の福利厚生などについてご説明させていただきました。さらに学生の皆様にも印刷業の流れをご理解いただくためにDVDをご覧いただきました。

その後は2班に分かれて工場見学です。6色オフセット印刷機及びUVインクジェット機をご覧いただいた際はスピーディーかつ正確丁寧な業務

を行う社員の仕事に感心の目が向けられました。また、UVインクジェットにおいては、紙だけでなくPOPをはじめ、木やアクリル、ゴルフボールなど様々なものにまで刷ることのできる印刷の可能性を感じていただけたようで驚きと歓喜の声が室内に広がっていました。

さらに4Fの土山ギャラリー見学の際は、従来の4色印刷とは大きく異なる6色印刷の再現率の高さや発色の鮮やかさに感動されたようで、「すごい!」「キレイ!」という声を何度も耳にしました。

見学の後はご覧いただいた6色RGB印刷について、データマネジメントグループの川口課長代理よりご説明をさせていただき、さらに、京都造形芸術大学のOGで、現在は弊社のデザイナーとしても活躍している網師本係長から「印刷会社におけるデザイナーの役割」についてお話をしました。特にデザイナーの活躍については、学生の皆さんにとっても一番身近で興味深いテーマだったようで、メモを取りながら真剣にお話を聞かれる姿が印象的でした。

最後は見学会の冒頭で撮影した記念写真をPETにプリントしたものを皆さんにお渡しして、終了となりました。

末筆となりましたが、今回の開催にあたりましてご協力いただきました京都造形芸術大学の丸井栄二准教授はじめ、京都府印刷工業組合の皆様、ならびに関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

敬具